慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一三年度ブルジュ・ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査
Sub Title	The 2013 archaeological excavations at Burj Beitin, Palestine
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 西山, 伸一(Nishiyama, Shinichi) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2014
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.83, No.1 (2014. 3) ,p.57(57)- 87(87)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20140300-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一三年度　ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査

杉本智俊
西山伸一
間舎裕生

Ⅰ．はじめに

慶應義塾大学文学部杉本研究室は、二〇一三年八月一四日から九月四日まで、パレスチナ自治区ブルジュ・ベイティン遺跡（以下、「ブルジュ・ベイティン」とする）において考古学的発掘調査を行った[1]。この調査はパレスチナ自治政府観光・考古省（Ministry of Tourism and Antiquities）との共同調査として行われたもので、昨年度の一般調査に続く四年計画の発掘調査の一年目である。

ブルジュ・ベイティンは、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区のラマッラーの北東約五キロメートルに位置するベイティン村にある複数の遺跡のうちの一つであり、村の南東部に舌状に張り出した高台の上に位置している（図1）[2]。遺跡には名称の由来となった切石積みの塔のような建造物が残っており、遺跡の存在は古くからよく知られていた（例えば Robinson 1856 : 448 ; Condor and Kitchener 1882 : 307 ; Albright 1968 : 2. 近年では Finkelstein, Bunimovitz, and Lederman 1997 : 522–23 を参照）。

ベイティン村の中央にあるテル・ベイティンは、聖書に登場する町ベテルと一般に同定されているが[3]、ブルジュ・ベイティンはそこから若干離れた場所に位置し、アブラハムが宿営した「ベテルの東」（創世記一二・八）だったと伝統的に解釈されている[4]。アブラハムを記念するビザンツ時代（後四世紀後半～七世紀前半）の教会あ

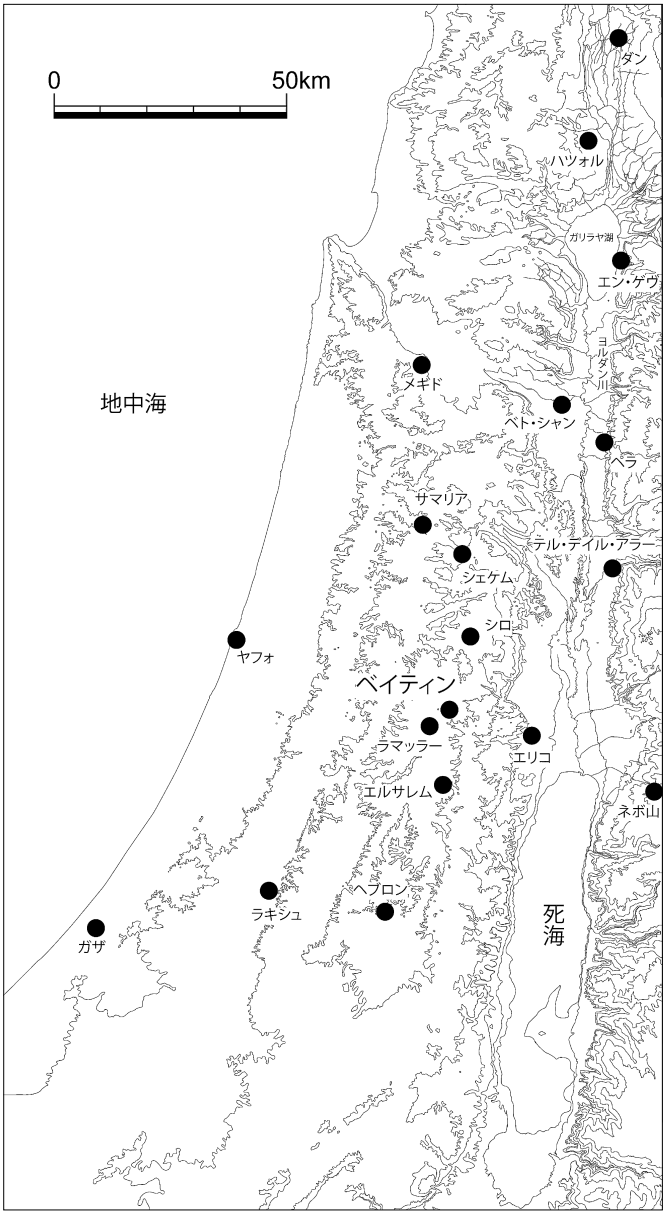

図1　ベイティン村の位置

るいは修道院があったとも言われている（Condor and Kitchener 1882 : 307 ; Finkelstein, Bunimovitz, and Lederman 1997 : 522）[5]。また、ヤコブが「天の梯子」の夢を見た場所（創世記二八・一一―二二、三五・一―一五）や分裂王国時代に金の子牛が置かれた「高き所」（Ⅰ列王記一二・二六―三三）も町から離れたところにあった可能性があり、それがブルジュ・ベイティンだと考える者たちもいる[6]。

このように、ブルジュ・ベイティンはこの地方の歴史及び古代イスラエルの宗教文化史を考える上で欠かすことのできない遺跡であるが、これまで一度も本格的な発掘調査が実施されたことはなかった[7]。これは、イスラエル国が成立し、オスロ合意以降にパレスチナ自治区が政治的に不安定な状況であったことが大きな原因と思われる。しかし、近年はパレスチナ自治区、特にヨルダン川西岸地区の情勢が比較的落ち着いているため、今回の調査が可能となった。

ブルジュ・ベイティンの調査においては、現在地上に残存する建造物を含む各種遺構の性格と年代把握が主たる目的となる（図2）。上述のように、遺跡にはビザンツ時代のキリスト教関連の建造物が存在したと考えられる。それが「修道院」だったのか「教会」だったのか、遺跡と周囲にあったキリスト教関連施設や巡礼路との関係はどのようなものだったのか、などを解明することが重要になるであろう。さらに、ブルジュ・ベイティンにあった建造物は本当にアブラハムを記念するものだったのか、それとも聖書の他の出来事と関連していたのか、あるいはそのような記念的な性格は持たなかったのかを確認する必要もある。

昨年度の一般調査から、本遺跡にビザンツ時代の遺構があることはほぼ確実だと思われるが、それ以前の痕跡が確認できるのかどうかも興味深い。アブラハムやヤコブは遊牧民であったとされ、仮に彼らがここに宿営していたとしても、その痕跡を考古学的に把握できるかどうかはわからない。しかし、ビザンツ時代以前の同遺跡の状況がどのようなものであったかを確認しておくことは重要であろう。もしここに聖所なり神殿なりが存在したとするなら、その痕跡は残ると思われる。

また、昨年度の一般調査によると、ビザンツ時代の土器片の他にマムルーク朝時代（一三世紀後半～一六世紀初頭）の土器片もかなり確認されている。この地がビザンツ時代以降にどのような歴史的変遷をたどったのか、

図2　調査前のブルジュ・ベイティン全景

マムルーク朝時代の状況はどのようなものだったのか、などを把握することも、この調査の重要な目的の一つとなる。特に現存している塔（以下、「ブルジュ」と呼ぶ）は、教会や修道院の一部としては構造上あまり整合性がなく、まったく別の性格をもつ建造物であった可能性が高い。ブルジュ自体、よく観察すると何度も石が積み直されているように見受けられ、どのような経緯を経て現在のような遺構になったのかを確認する必要がある。

二〇一三年度の調査団の構成は以下の通りである。日本からは、杉本智俊（日本側団長、慶應義塾大学文学部）、西山伸一、渡部展也（以上、中部大学人文学部）、岡田真弓（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、間舎裕生（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程、東京文化財研究所客員研究員）、渡邉絢、高田優衣（以上、慶應義塾大学文学研究科修士課程）であり、この他に慶應義塾大学、東海大学、中部大学、東京基督教大学の学生がボランティアとして参加した。パレスチナからは、H・タハ（パレスチナ側団長、パレ

スチナ観光・考古省次官）、J・ヤシン（同省発掘調査課長）、S・タワフシェ（同省ラマッラー、アル＝ビレ支局長）、A・シャワムラ（同省情報管理課長）、B・ナサスラ（同省ナブルス支局長）、M・ガイヤーダ（同省ベツレヘム支局長）、M・ヘロ（同省建築技師）が参加した。また、現地ベイティン村から十二〜三名の労働者を雇った。

今年度は遺跡の三つの地区で発掘を実施した。各地区のスーパーバイザーおよびアシスタントは、A地区―西山伸一、A・シャワムラ、B地区―間舎裕生、M・ガイヤーダ、C地区―西山伸一、高田優衣（アシスタント）であった。地形図作成、調査区の設定、遺構実測は、渡部展也と各地区のスーパーバイザーが担当した。渡部は合わせて同遺跡の自然地理学的調査も行った。モザイク床の保存に関しては、パレスチナ観光・考古省エリコ支局のB・シュカイルが担当した。土器などの遺物実測は、学生ボランティアを含めて行ったが、そのとりまとめは渡邉絢が担当し、トレースのとりまとめは高田優衣が行った。調査時のボランティア係は、高田優衣である。

本調査では、遺跡全体に五×五メートルのグリッドを設定し、それぞれ東西方向、南北方向にアルファベットと数字の番号を付した。調査は、このグリッドを基本として記録するようにした。ただし、部屋の遺構など構造が地上に明確に残されている場合には、その建造物単位ごとに調査を実施したので、かならずしもグリッド全体を一気に発掘することはしておらず、ローカスもグリッドをまたいで設定される場合もあった。

以下に述べる各地区ごとの調査概要は、スーパーバイザーたち（西山、間舎）のレポートに杉本が加筆修正をしたものである。本来はアルファベット順に報告すべきであろうが、内容のわかりやすさを考え、B地区、A地区、C地区の順で記述することにする。また、層位に関しては、各地区で表土、十字軍〜マムルーク朝時代[8]、ビザンツ時代、および岩盤（ベッドロック）が確認されており、ローカスによってはさらに層位を細分することができる。しかし、現段階では、まだ全体的な層位関係を確定することができていないので、以下の各地区の層位、および年代の記述はあくまで暫定的なものとしておきたい。

Ⅱ．B地区

B地区は、ブルジュ・ベイティンの西端を南北に走る

周壁の中央から南半分の部分に設定された。この周壁は、約四メートル間隔をもって幅約一・二メートルの壁が平行に走る構造になっており、壁の内部は東西方向に走る隔壁によってさらに部屋に分けられていた。

周壁の西側中央部からは、二本の柱によって区切られた門が発見され、その内側（東側）は部屋（部屋4）となっていた。その南側には、大きな石敷きの部屋（部屋3）があり、さらにその南側の二つ部屋（部屋2、部屋1）からはモザイク床が検出された。門の東側と南西端の部屋の東側では、この周壁に囲まれた内部空間（「中庭」[9]？）の床だと思われる面が検出され、その下では岩盤と周壁の関係を確認することができた。また、南西端の部屋の外側（南側）部分も岩盤まで発掘し、この周壁の建築手法を確認することができた。

ここでは、門とその付属施設周辺をB1地区、南西端の部屋周辺をB2地区として報告する。

1．基本層序

表土層：大型の石を多数含む。

第Ⅰ層：ビザンツ時代の遺構に数度の破壊と改変が加えられた痕跡が認められる。それぞれの年代を特定することは現段階では難しいが、マムルーク朝時代の土器を多く含んでいる。

第Ⅱ層：ビザンツ時代の周壁

岩盤：石灰岩の岩盤

B地区の遺構は、基本的にビザンツ時代に建造され、その後、何度かの破壊と改変を経験したものと思われる[10]。表土はいずれの発掘区においても、頭大もしくはそれ以上の大型の落石を多く含む締まりのない土であり、場所によっては七〇センチメートル以上にわたって堆積していた。これらの石には自然石だけでなく、本来ブルジュ・ベイティンにあった建造物の建材であったと思われる整形された切石も多く見られた。表土には考古遺物に混じって現代のゴミも含まれていた。表土と表土直下との区別は明確でないが、こういった現代の廃棄物が見られなくなった段階で、便宜的に表土直下とした。

これらの大型の石は、その下で発見されたプラスター貼りの床やモザイク床を破壊していた。石はモザイク床の上からだけでなく、プラスター貼りの床の上からも発見されたので、その堆積は一度の破壊によって形成されたわけではないと思われる[11]。この層の土器には、ビザン

ツ時代からマムルーク朝時代のものが含まれていたが、多くはマムルーク朝時代のものであった。このため、少なくとも最後の改変はマムルーク朝時代に行われたと言えるであろう。ただし、すべての改変が同時期だったわけではないようであり、それらの厳密な年代は現時点で確定することはできない[12]。

2．B1地区

(1) ビザンツ時代以降

西側周壁の西側の壁中央部では、二基一組の方形柱基に短い柱身がつけられた柱台がビザンツ時代の切石敷きの床の上に置かれ、門が設置されていた（図3）。しかし、門の開口部には石がつめられて封鎖されていた。おそらくビザンツ時代以降（イスラーム時代?）に、門は意図的に閉じられたものと思われる。一段目は粗い切石、二～三段目は自然石であったので、あるいは二度そのような改築が実施されたのかもしれない。

門の内側の部屋（部屋4）の正面（東側）の壁にも開口部があったが、これも大きな不揃いの石で閉じられていた（図4）。この部屋の北側と南側の壁には開口部がなかったので、結果として、この部屋にはどこからも入ることができない状態になっていたと考えられる[13]。

このように四方が閉じられた部屋4の内部は、床も壁もプラスターが全面に施されていた。プラスター貼りの床は、四方の壁に取りついてほぼ完全な状態で検出された（八七八・五三〇メートル）。床そのものの調査が実施されていないためプラスターの厚さは不明だが、壁面に残るプラスターの厚さは約三センチメートルであった[14]。床の南端付近からは、器形の復元が可能なマムルーク朝時代の調理用土器（クッキングポット）が出土しており、このプラスター貼りの床が使用されていた時期を決定する指標になると思われる。

その南隣の部屋3では、プラスター貼りの床は確認されなかった。さらにその南の部屋2ではプラスター貼りの床が出土したので、部屋3の床は落石などで破壊されてしまった可能性も考えられるが、部屋2の床面のレベルは部屋4とはかなり異なっていた（後述参照）ので、これらは連続するものではなく、もともと部屋3はプラスターで覆われていなかったものと思われる。一方、この部屋3の東の壁にある開口部と南の部屋2に入る開口部は石で封鎖されており、出入りできなくなっていた。このことから考えると、部屋2にプラスターが貼られた

図３　Ｂ地区出土の門（南西側から撮影）

図４　Ｂ地区部屋３及び４（南東側から撮影）

時期と部屋4と3の開口部が石で封鎖された時期は異なるのかもしれない。

(2) ビザンツ時代

上述したように、周壁の西側中央部からは、二基の柱の基礎が組み込まれた門が検出された。二基の柱の間隔は約一・七メートルであり、おそらくこれがビザンツ時代のブルジュ・ベイティンの建造物そのものの出入口であったと考えられる。西側側面から見ると、柱の基礎は整形された切石の床の上に設置されていたが、門の開口部には石が詰められていた。

その内側の部屋4では、マムルーク朝時代のものと考えられるプラスターが床と壁全面に敷かれていた。しかし、以下で記す部屋3の大きな石敷きの床の状態から考えると、ビザンツ時代の部屋4には、それと同様の石敷きの床があった可能性が高い。その場合、ビザンツ時代の部屋4と3は、壁で仕切られていない一つの大きな部屋であったと思われる。

部屋3では、一辺が一メートル以上ある、なめらかな板状の石で貼られた石敷きの床が検出された。この床は、部屋の内側全体を占めていた。その北端は、部屋4の南の壁W 377の下にもぐっているので明らかになっていないが、おそらくこの壁の下をくぐって部屋4のプラスター貼りの床の下に続いているものと思われる[15]。この石敷きの床のレベル（八七七・八〇メートル）と柱の基礎から想定される床のレベル（八七七・〇〇メートル）には約八〇センチメートルの差があり、両者は水平ではない。おそらく入口部分に、階段のようなものが造られていたと推定される。

部屋4と3の東側には開口部が設けられており、ビザンツ時代には周壁の内部に入れるようになっていた。部屋4の開口部は幅約一・七メートルで門の幅と対応している。部屋3の開口部は幅約一・一メートルであるが、この部屋の西側に門があったかどうかは、まだ確認されていない。これらの出入口の抱き柱はほぼ同じ形に成形された大型の切石で作られており、その両端は、扉を留められるよう直角に細工されていた。部屋の内側に向いた面は、数本の縦溝によってフルーティング装飾が施されていた。左右対称であったと考えるなら、同様の部屋と入り口は門の北側にも想定され、この門は三連の出入口をもつりっぱな造りの門であった可能性がある。同じような加工のある石は、部屋3とその南側の部屋2をつなぐ出入口にも確認できた。ただし、この出入口周囲の

石には、フルーティング装飾は認められなかった。

(3)　岩盤

部屋4の東側では、東側の周壁（W 329）の東面で岩盤を確認することができた。この周壁は、後述する部屋1東側のW 309東面と同様、岩盤直上ではなく、三〇センチメートル以上堆積したテラロッサ（*terra rossa*）の上に造られていた。このテラロッサはおそらく石灰岩の岩盤に由来する自然の堆積層であろう。最下段の石は高さ約三〇センチメートルで、その上端にはプラスターの痕跡が残されていた。おそらくこれが床面の位置と考えられる。

3．B2地区

(1)　ビザンツ時代以降

南西端の部屋は、隔壁によって二つに分けられていた（部屋2、部屋1、図5）。北側の部屋（部屋2）では、その西側からプラスター貼りの床が検出され、東側の下層からビザンツ時代のモザイク床が出土した。南側の部屋（部屋1）では、ビザンツ時代以降の床は認められず、表土の下から部屋2と連続するモザイク床が検出された。しかし、部屋の西側では、モザイク床が壊されて穴が岩盤まで掘りこまれ、その中に大型の「石臼」が置かれていた[16]。

部屋2で検出されたプラスター貼りの床は、部屋4のものより約四〇センチメートルほど低いレベルであった（八七八・一四〇メートル）。部屋2のプラスター貼りの床は部屋4ほど良好に残っておらず、西側で断片的に検出されたにすぎない。このため、床の広がりを確認することは難しいが、少なくとも部屋の西と北の壁は、ビザンツ時代に造られた壁をそのまま利用していたと考えられる。

部屋2の南は隔壁によって区切られていたが、この壁は二つの時期に造られたようである。上の壁（W 313）は二列の自然石を粗雑に積み上げた石積みで、北面から見ると、下端は部屋2のプラスター貼りの床よりもレベルが高い位置にあった。その下には、覆土をはさんでほぼ同じ方向の隔壁（W 346、一列の壁だと推測される）があり、これにプラスター貼りの床は取りついていた。したがって、ここでは、プラスター貼りの床が造られた時にW 346が造られ、その後おそらくプラスター貼りの床が使用されなくなってからW 313が加えられたと考えられる。

図５　B 地区部屋２における改築状況

部屋２の南の隔壁の下からは、さらにそれと直交するように一列で一段の壁（W 345）が部屋の中央を走っていた。この壁の東面にはプラスターが塗られており、壁の直下からモザイク床が検出された。壁の東側と西側幅一メートルの範囲を調査したところ、モザイク床は壁の東側で破壊されていた。しかし、西側でもモザイク床の一部が確認され、モザイク床を敷くための基礎と思われる細かい土の堆積も検出されたので、元来モザイク床は部屋の全面に広がっていたものと思われる。一方、壁 W 345 はファウンデーション・トレンチを設けることなく、モザイク床の上に直に建設されたようである。この壁の年代はまだ決定できないが、プラスター貼りの床の下から出土した土器が参考になるかもしれない。

モザイク床はビザンツ時代の切石積みの建造物に付属すると考えられるが、そうすると、ビザンツ時代以降少なくとも三回の改築がこの部屋では行われたこととなる。

部屋１では、モザイク床が破壊されていた西側をさらに掘り下げたが、上述したように大型の「石臼」が置かれていたことが判明した。すでに、モザイク床とほぼ同一レベルからその一部が露出していたが、最終的にそれは岩盤直上に置かれた、直径約一メートル、高さ約一メ

ートルの「石臼」であることが確認された。この「石臼」には左右対称の位置に矩形の溝が彫られており、おそらく牛馬などの家畜に引かせて動かす臼であったと思われるが、その周囲には動物が動けるような空間は存在していない。また、この「石臼」は上石であると思われるが、下石は見つかっていないので、このままでは使用できなかったはずである。なぜ、また、どのようにしてこの重量のある「石臼」が部屋の中に置かれたのかは今のところ不明である。ただ、「石臼」周辺の岩盤からモルタルで固められたモザイクのテッセラ片が出土していることから、この臼はモザイク床が遺棄された後に持ち込まれたものと考えられる[17]。

周壁の南、つまり部屋1の外側からは、ウシなどを含む大型獣の骨がまとまって出土した（後述参照）。プラスターで閉じられた建築や大型の石臼の存在を考えると、この部分は居住空間の外に位置するようになっていたと思われる。

(2)　ビザンツ時代

周壁の南側部分には、門から同じ間隔で平行に走る二本の壁によって、一つの部屋が形成されていた。この部屋は、ビザンツ時代以降には隔壁で分断されたが、ビザンツ時代には連続するモザイク床が敷かれた部屋であった。部屋2では、その後少なくとも三度の改築が行われたと思われるが、部屋1では、大量の落石を含む表土を取り除くとすぐにモザイク床が出土した。

これらのモザイク床は、東側の壁から約九〇センチメートルの幅で帯状に認められた（図6）。モザイクは、白色のテッセラ（おそらく石灰岩）を背景とし、青もしくは灰色のテッセラによって組み紐紋と波型紋が描かれている。文様の方向は周壁と平行であった。部屋1では、植物の茎で構成されたメダリオンのような図柄が褐色のテッセラで描かれており、部屋2ではブドウの図柄が確認された。本遺跡の覆土中から取り上げられたテッセラは、白色で一辺が二センチメートル近くある比較的大きいものが多かったが、上述のモザイク床を構成しているテッセラは、一辺が一センチメートル以下であり、非常に緻密なテッセラであるといえる。

周壁の東側に位置する建造物の「中庭」に相当する部分でも、別のモザイク床が検出された。しかし、このモザイク床は、大部分が後代に破壊されており、テッセラも大きな白色のものだけであった。おそらく上述の周壁内の部屋のテッセラとは目的も図案も異なるものだった

図6　B地区部屋2のモザイク床

と思われる。「中庭」でモザイク床の残っていなかった部分をさらに掘り下げたところ、若干ではあるが、表土層とは異なる砂利を含む土層が確認された。これはモザイク床を造るための基礎の一部だったと思われる。「中庭」のモザイク床は、周壁に位置する「中庭」への出入口の敷居石と同一レベルにあった。このことは、「中庭」のモザイク床と周壁への出入口が同時に造られたことを示している。一方、部屋1と部屋2のモザイク床は、「中庭」のモザイク床よりも約二〇センチメートル低いレベルに造られていた（八七七・九〇〇メートル）。これらは同一時期に造られたものと考えられるが、周壁の内外でレベルが異なるというのは興味深い。

周壁の東側では、出入口が二つ確認できた。これらは門と比べると、はるかに単純な造りで、幅も狭かった（L 365は幅約一・七メートル、L 315は約七〇センチメートル）。しかし、双方の出入口とも、後に頭大の石を詰められて閉鎖されていた。閉鎖された石積みの様子は、他の改変箇所と同様に雑であるが、正確な時期は現在のところ不明である。門の内側の部屋（部屋3、4）と同様、周壁の他の部分の出入口もビザンツ時代以降には閉鎖されたと考えられる。

(3) 岩盤

本調査区では、周壁の東面と南面で岩盤に到達した。どちらの箇所でも、岩盤の直上に切石を積んで壁が造られていた。岩盤は特に加工されておらず、自然の傾斜面がそのまま利用されていた。門の内側で確認されたように、遺跡の周壁はビザンツ時代に建造された可能性が高い。

上述した「中庭」のモザイク床の検出された発掘区では、モザイクの残っていなかった北半分を掘り下げると、約七〇センチメートルの深さで岩盤に到達した。しかし、モザイク床以前の居住の痕跡は確認できなかった。

周壁の東面では、モザイク床や敷居石の位置から、床下には二段の石積みの基礎があることが判明した。この二段の石積みはそれぞれ高さ約二〇センチメートルの切石で構成されている。一方、床面より上の切石積みの壁は、上段へ上がるにつれて大きな石を用いていた[18]。

周壁の南側では、表土層と同じような土の堆積が約九〇センチメートル続いた後に岩盤に到達した。ここでも周壁の基礎が岩盤の直上から積まれている様子が確認された。最下段の石の大きさは、岩盤の形状に合わせて調整されていた。また、出土土器のほとんどはビザンツ時代のものであったため、周壁の基礎はビザンツ時代に建造された可能性が高い。

上述した「石臼」の置かれた部屋1の内側でも、西面と南面で周壁と岩盤の関係を確認することができた。壁の基礎は、岩盤上に堆積した約二〇センチメートルの厚さのテラロッサの上に建てられており、部屋4の東側の状況と類似していたが、最下段の石が自然石である点は部屋4の東側と異なっていた。この自然石の上に幅約八〇センチメートル、高さ約二〇センチメートル程度の切石が二段（W 312 北面西部では三段）積まれており、その上端が部屋内のモザイク床と同一レベルであった。これは、壁の基礎を岩盤の凹凸に合わせて調整したためだと考えられる。

4．B地区の遺構の性格

本調査区の結果から、ブルジュ・ベイティンの周壁及びそれに付属する門と部屋の性格について、以下にまとめることができる。

①ブルジュ・ベイティンの西側にある周壁は、出土土器とモザイク床からビザンツ時代の遺構と考えられる。

②この周壁は、石灰岩の岩盤、あるいは、その上のテラロッサの層の直上に建てられている。つまり、ビザンツ時代以前に遡る居住の跡は確認できなかった。

③周壁は、切石で造られており、列柱や、フルーティング装飾の施された抱き柱、石敷きの床をもつ壮麗な建築であったと考えられる。また、周壁内部の部屋はモザイク床で装飾されていた。

④その後、門を始め、すべての出入口は石で閉鎖された。改築に用いられた壁は、ビザンツ時代の建築に比べるとはるかに粗雑である。また、最終的に、門の内側の部屋の内部にはプラスターが塗られた。

⑤改築は少なくとも三度確認でき、最終的に、マムルーク朝時代に門の内側の部屋にプラスターが塗られたと考えられる。しかし、それ以前の改築の年代は特定できない。

Ⅲ．A地区

A地区は、遺跡の中心部分に残る「ブルジュ」の西側に設定された。大きさは、一六×三メートルを測り、発掘区のH10区、I10区、J10区に含まれる。

1．基本層序

表土層：ビザンツ、マムルーク朝時代の土器を含む。

第Ⅰ層：マムルーク朝時代の彩文土器、施釉陶器、および多くの石灰岩製の切石片を含む。

第Ⅱ層：十字軍～マムルーク朝時代（ブルジュの入口の西方に位置する石敷き床をもつ遺構、およびブルジュの北側に接する東西方向に走る壁を含む）

第Ⅲ層：十字軍～マムルーク朝時代（水路およびトレンチ南端に位置する東西方向に走る壁を含む）。

第Ⅳ層：ビザンツ時代の遺物包含層。

第Ⅴ層：ビザンツ時代（石敷き床、石敷き床直下の水路、およびブルジュの基礎を含む）

岩盤：石灰岩の岩盤

ブルジュ本体を観察すると、四辺それぞれの長さ（約一〇メートル）が若干異なること、石積みのパターンが異なる部分が存在すること、石積みの中にはリンテルや装飾のある石がオリジナルでない位置に填め込まれていることなどから、複数回に分けて積み上げられたり補修

されたりしたことが明らかである。現地表面からもっとも高い部分は、ブルジュの北西隅であり、高さは約五メートルである。後述するようにブルジュの基礎は岩盤の上に直接建造されており、岩盤からの残存高は約七・五メートルであった。

2．十字軍～マムルーク朝時代

表土とその直下からは、マムルーク朝時代の遺構と遺物が検出された。この時代の包含層（第Ⅰ層）は、大きく上層と下層の二つに分けることができる。上層は、多くの大型の石が混入している層で、土器片は下層に比べると少ない。混入している大型の石には、全面が平らに整形された長方体の切石も含まれているが、整形されていない自然石も含まれていた。切石は、ビザンツ時代の建造物に使用されていた建材と考えられる。

第Ⅱ層では、ブルジュ西面に位置する入口部分を閉鎖するように南北方向に走る壁がブルジュに接して築かれていた。入口部分の南では、上述の南北壁に接続する形で西方へ延びる一列の石列が確認できた。この東側と南側を壁で囲まれた遺構は、何らかの空間もしくは部屋を構成していたと考えられる。この遺構の床面には、四枚の切石が敷かれていた。残念ながら、この遺構の北壁と西壁にあたる部分は攪乱により破壊されていたため、遺構の全体像は不明である。ただ、南壁は大きさの異なる大小の石を適当に組み合わせ、石の隙間に砂利を充填して構築されていた。このような簡易的ともいえる構造をもつ壁から考えて、この遺構は恒久的な目的のために建造された構造物とは考えにくい。この遺構の覆土から出土した土器の多くは、マムルーク朝時代の彩文土器や無紋土器であった[19]。

上述の遺構の下層には、破棄された石材を多く含む攪乱が位置していた。この攪乱はブルジュの北壁の辺りまで広がる。石材には、切石だけでなく、大型の自然石も含まれていた。この攪乱の南西部からは、ほぼ完形で小型の大理石製柱頭（コリント式）、および大理石製の柱身片が出土した。この柱頭の類例は、ベツレヘムの降誕教会（Church of the Nativity）にも見ることができる。十字軍時代に建造されたというベツレヘムの柱頭の年代が正しいとするなら、攪乱から出土した柱頭は、十字軍時代に作られたものが後のイスラーム時代のある時期に破壊され、他の石材とともに遺棄されたと考えられる。

上述の攪乱の下からは、水路が発見された（第Ⅲ層、

図７　A 地区ビザンツ時代の水路及び十字軍～マムルーク朝時代の水路（北側から撮影）

図7）。この水路には、「沈殿槽」（水路の途中に設けられ水流をさげ、ゴミなどを沈殿させる施設）と考えられる方形のプランをもつ遺構（約五〇×六〇センチメートル）が付属していた。「沈殿槽」は、ブルジュの入口の西方に位置しており、丁寧な石積みで作られていた。水路は、この「沈殿槽」をはさみ南北方向に走っていた。残念ながら北側の水路は攪乱によって破壊されていたが、南側の水路は保存状態が良く、水路を覆う「蓋」も検出できた。水路本体は、平石を両脇に配置する形で作られ、幅約二〇センチメートルを測る。その蓋は、約四〇×五〇センチメートル程度の平石を何枚か配置することで作られていた。南側の水路は、緩やかなカーブを描きながらトレンチの南西隅へと続いていた。これがどこへつながるかは不明であるが、ブルジュの西方にある「中庭」（B地区を参照）の下にある「貯水槽」との関連が推測できる。また、この水路は、ブルジュの入口の南に敷かれていた三枚の平石の上に構築されていた。後述するようにこの平石は、ビザンツ時代の敷石と考えられるため、水路はそれ以降の年代に位置づけられると思われる。また、水路の覆土からはマムルーク朝時代の施釉陶器が出土した。

上述の水路と沈殿槽の直上には、厚さ約五センチメートルのビザンツ時代の遺物包含層（第Ⅳ層、以下参照）が存在した。この層には、土器片（硬質のものが多い）、施釉陶器、炭化物などが多く含まれていたが、上層にあった建材用の石はほとんど含まれていなかった。つまり、この包含層はビザンツ時代の生活面であった可能性が高い。水路と沈殿槽は、この層を掘り込んで作られていた。

この他の十字軍～マムルーク朝時代に相当する遺構としては、トレンチ南部で検出された東西方向に走る壁がある。この壁は高さ約一・八メートル、幅約二メートルを測り、上述のビザンツ時代の包含層に掘り込んで建造されていた。壁の外面は主に切石で構築され、その内部には大小の自然石が充填されていた。この壁は東端でブルジュの南西隅に接続し、西方へはB地区で調査された周壁へと延びている。壁の外面に使用されている切石は、もともとビザンツ時代の建造物に使われていたものであり、それらが後に再利用されたものと考えられる。

ブルジュの入口のすぐ北側では、入口から約一・五メートル西に延びる壁が発見された。この壁はブルジュの入口を塞いでいた南北壁の下で見つかり、ビザンツ時代の切石、柱身片、および丸い自然石を使用して築かれて

いた。特に入口に接して配置されていた平石には、片面に直線状の溝が掘られていた。この溝は一方の端で太く深くなっていた。この石は、おそらくオリーブプレスのような液体に関連する施設に使われた建材が再利用されたものと思われる。入口の南側ではこの壁に対応する壁は検出されなかった。

ブルジュの入口自体は、現地表面から約一・七メートル掘り下げたところで完全に検出された。入口の高さは、約一・九メートル、幅約一・四メートルであった。入口は、上述したように十字軍～マムルーク朝時代の壁でふさがれていたが、それを取り外すと複数枚の堆積層が確認できた。堆積層では、石で構成された層と土で構成された層が交互に観察された。今シーズンは、入口内部の調査は行わなかったので、この部分はそのまま次シーズンへと残された。入口のリンテル（楣石）はシンプルな作りで、二段に区切られた長方形のモチーフが彫り込まれていた。

ブルジュの入口に向かって右手上方には、円形の中に十字架と思われる文様が彫り込まれたメダリオンのモチーフをもつ切石が埋め込まれていた。メダリオンの両脇には、連続するΛ（ラムダ）のような形で内部が充填された長方形のモチーフが刻まれていた。この切石はもともとビザンツ時代の建造物の一部であったが、後にブルジュの建材として再利用されたものと考えられる。

似たような文様のあるリンテルは、ブルジュの北壁にも見られた（北壁に向かって右手下方）。この切石には、三つのメダリオンが彫られており、上述の切石と類似するラムダのような形が充填された長方形のモチーフが中央のメダリオンの両脇に配置されている。三つのメダリオンのうち左手のものは、残念ながら内部が削りとられているためモチーフは不明である[20]。しかし、中央のメダリオンには菱形の外枠がある十字架、右手のものには六つの花弁をもつ花のモチーフがそれぞれ刻まれていた。

最後にトレンチの北側では、第Ⅱ層に相当するレベルで東西に延びる二列の石列からなる壁が検出された。この壁はブルジュの北壁と接しており、ブルジュのすぐ北側を走る壁と考えられる。

3．ビザンツ時代

ビザンツ時代の痕跡としては、上述の十字軍～マムルーク朝時代の水路が掘り込まれた包含層（第Ⅳ層）がまずあげられる。この層は、上述したようにビザンツ時代

の生活面の可能性が高く、ブルジュの入口より少し下方に位置する。このことからブルジュの入口は、ビザンツ時代以降に建造された可能性がある。このビザンツ時代の層を取り除くと、この水路が埋設されていた層があり、その下には敷石のある層（第Ⅴ層）が発見された。敷石面のレベルは約八七八・二〇〇メートルであり、その範囲はブルジュの入口近辺からトレンチの北にかけて広がっていた。ブルジュの入口の少し南には、上述したように大型の三枚の平石がブルジュ周辺の敷石としてブルジュと直角に配置されていた。

この敷石の南側では、モザイク床が検出された。残念ながらこの床は大きく破壊されており、モザイクはわずかな部分しか残存していなかったが、黒、白、赤色のテッセラの使用が確認できた。このモザイク床の存在は、敷石の南側が建造物の内部であったことを示している。一方、敷石の北側は、建造物の「中庭」に相当する空間であったと推測できる。北側に広がる敷石は、B2地区にある「中庭」のモザイク床とレベルがつながる可能性がある[21]。この「中庭」の敷石がある床面の下からは、ビザンツ時代の水路が発見された。この水路は、十字軍～マムルーク朝時代の水路とほぼ同じ方位（南北方向）と位置（ブルジュの西側）に配置されていたが、水路の幅はより狭く、また丁寧な石積みで造られていた。水路は発掘区のさらに北へと続いているが、どこに向かっているかは現段階では不明である。

上述の「中庭」の敷石は、ブルジュの西壁から約三〇センチメートルの幅で途切れていた。これが、ブルジュのファウンデーション・トレンチとみられる。ファウンデーション・トレンチは、一見、中庭の敷石を「切って」いるようにも見える。一方、上述したブルジュの入口の南にある三枚の敷石のうちブルジュに最も近い石は、ブルジュの西壁に接していた。より詳細に観察するとブルジュの西壁の石が少し抉られ、そこに敷石が「かまされて」配置されていた（図8）。これらのことから、後述するようなブルジュとビザンツ時代の遺構の関係が想定できる。

さらに、A地区における地山を確認するために、ブルジュの入口前に小さなサブトレンチを設定した。この調査から、ビザンツ時代の別の短い水路がブルジュの西壁から垂直に西へと延びていることが明らかになった。この水路は、ブルジュの壁から約一・二メートルの地点で上述した南北方向に走る水路に接続する。またこの水路

図８　A地区ビザンツ時代の石敷きとブルジュの関係

は、ブルジュの西壁によって切断されているようにも見える。この水路を取り払い、その下を掘り下げたところ、テラロッサを含む粘性の強い土層があり、その下で石灰岩の岩盤に到達した。岩盤は、ブルジュの入口から約九〇センチメートル下に位置していた。また、ブルジュの壁は直接岩盤の上に構築されていることが明らかになった。

4．ブルジュの年代に関する知見

A地区の発掘調査の目的の一つは、ブルジュの建造年代を明らかにすることであった。その意味では、確実な収穫があったと考える。

まず、ブルジュの基礎は、上述したように岩盤の上に直接構築されており、基礎の西側にはビザンツ時代の遺構（水路、モザイク床、敷石のある「中庭」）が配置されていた。上述の岩盤まで到達したサブトレンチの観察に基づくと、ブルジュの年代に関して二つの仮説を提示することができる。

①ブルジュの基礎とビザンツ時代の遺構はほぼ同時期である。つまり、ブルジュの起源はビザンツ時代にあると考える。ただし、前述したようにブルジュ本

体の大部分は明らかに後代に複数回積み直されたと考える。その場合、ビザンツ時代のブルジュの基礎は、西壁の最下段（一～二段目程度）だけではないだろうか。

②ブルジュの基礎とビザンツ時代の遺構は異なる時期である。つまり、ファウンデーション・トレンチを率直に解釈するとすれば、ブルジュの基礎はビザンツ時代の遺構を「切って」建造されており、ブルジュ自体はそれ以降の時代（中期から後期イスラーム時代）に建造されたと考えられる。

①を支持する理由としては、以下の点が考えられる。⑴ビザンツ時代の建造物が再利用されたことが他の発掘区からも観察できること、⑵ブルジュの壁自体の大半は後の時代に再構築されたものであるが基礎の部分は水路やモザイク床の建造物の基礎と建物の「方角」が不自然に違っていないこと、⑶ブルジュのファウンデーション・トレンチはビザンツ時代の包含層（厚さ約五センチメートル）の下から確認できること、である。一方、②を支持する理由としては、⑴ブルジュのファウンデーション・トレンチは、明らかにビザンツ時代の石敷きの床を切っていること、⑵石積みの目地には「セメント・モルタル」が最下段から中段まで塗られており、これは本遺跡で見られるビザンツ時代の精巧な切石積みの建築とは性格が異なること、である。

しかし、建築年代について最終決定を行うには、来シーズン以降、ブルジュ内部の調査を行い、検出された基礎がどのような性格のものであるかを確かめる必要がある。

Ⅳ．C地区

1．C1地区

本調査区はブルジュの南東に位置し、大きさは八×四メートルを測る。表土層をはいだ段階で、東西方向に走る現代の壁の南側に新たな部屋が検出された。この調査区の目的は、ブルジュ・ベイティン地区の南東隅の境界を確認することであり、K15区、K16区、K17区に含まれる。

⑴　基本層序

表土層：ビザンツ、マムルーク朝時代の土器を含む。

第1層：マムルーク朝時代の無紋土器、彩文土器、施釉陶器を含む。

図９　Ｃ地区マムルーク朝時代の「家畜小屋」（南側から撮影）

この層の下にも層序が堆積しているが、今シーズンはこの層の途中で調査を中断した。

(2)　マムルーク朝時代

本調査区で検出された遺構は、出土土器からおそらくマムルーク朝時代に年代づけられると考えられる（図９）。調査区には、現代に構築された耕地区分用の石積み壁が東西方向に走っている。この東西方向の壁は、長さ約五メートルで、西端は直角に北に曲がり切石の壁へと接続している。この切石の壁は、検出した壁の上部は、こぶし大の石が積まれた現代の耕地区分用の壁の一部を構成しているが、最下段から上に三段までは比較的古い時代の壁と考えられる。この部分では、切石が整然と積み上げられているのが観察できる。

上述の切石の壁の南一・六メートルで検出された壁は、一列の石列をもち、切石だけでなく、自然石も使用されていた。この壁と切石の壁で囲まれた空間は部屋を成していて、その入口は東面に位置していた。入口の幅は約八〇センチメートルで、敷居石が設置されていた。入口から部屋に入ったすぐ右手（北側）には、家畜の「飼い葉桶」と考えられる四角形の石製容器が見つかった。

この部屋の入口では、切石の壁が北へ続いているのが

確認できた。つまり、この部屋は、切石の壁で囲まれた建造物の外側（南側）に作られた付属の部屋と考えられる。一方、部屋の入口外（東側）では、いくつか切石が集中している箇所が見つかったものの、三×四メートルの発掘範囲からは、明確な壁は発見できなかった。従って、この部屋の東側にはある程度広い野外の空間が存在したと考えられる。上述した「飼い葉桶」の存在と、部屋が切石の建造物に付属的に建造されていたことから、この部屋は「家畜小屋」として機能したと考えられる。部屋の床面は明確には検出できなかったが、部分的に確認できた炭化物が散乱した硬化面が床面であったとも考えられる。このことから、部屋の床面は土を踏み固めただけの簡素なものであったかもしれない。

2．C2地区

本調査区はブルジュの東に位置し、大きさは六×六メートルを測る。調査区の深さは、北西の部屋（通称「キッチン」）で約二メートルに達した。調査区は、H14区に含まれる。

(1)　基本層序

表土層：マムルーク朝時代の土器が中心だが、ビザンツ時代の土器を含む。

第1層：マムルーク朝時代の無紋土器、刻紋土器、調理用土器（クッキングポット）、および彩文土器を多量に含む。若干の施釉陶器も確認。後述する「キッチン」では、灰混じりの黒色の遺物包含層が観察された。他の部屋では、比較的柔らかい灰色の包含層が堆積していた。

第2層：「キッチン」では、柔らかい黄色の包含層が堆積する。マムルーク朝時代の土器は第1層より少なめであった。

第3層：「キッチン」では、堅く締まった黄色土からなる。土器は、第1層より少ないが、第2層よりは多い。

岩盤：石灰岩の岩盤

本調査区では、マムルーク朝時代の堆積層が表土層直下から岩盤まで確認できた。このことは、この調査区にビザンツ時代の遺構は建造されていなかったことを示している。したがって、ブルジュ・ベイティンの東部に残る建造物は、ほとんどがマムルーク朝時代のもので、岩盤の直上に建造されたものであると考えられる。

図 10　C 地区マムルーク朝時代の「キッチン」（南側から撮影）

(2)　マムルーク朝時代

C 2地区では、現地表面の下数センチメートルより遺構が姿を見せ始めた。トレンチの中央部では東西に走る厚い壁（幅約一メートル）が検出された。この壁は三列の石列から成るが、このうち南の二列が石の大きさや形状（切石）、石積みの方法から同一の壁と考えられる。北側の壁は一列の石列からなる壁であり、南側の壁に寄りかかることで強度を保っていたと思われる。北側の壁は、壁の上端部で内側に若干カーブしていた。つまり、この壁で囲まれた部屋は、南北方向のアーチがかけられた天井部をもっていたと推測できる。

上述の三列の壁の北側と南側では、異なる遺構が検出された。壁の北側では、部屋が東と西にそれぞれ位置していた。西側の部屋は上述した「キッチン」であり、マムルーク朝と考えられる時期の土器が特に多数出土した（図10）。土器には、器形のわかる残存状態の良い調理用土器の他、様々な器形のヴァラエティを含む彩文土器（Fine Hand Made Geometric Painted Wares : HMGPW）が出土した。これらの彩文土器は、配膳用の食器として利用された可能性がある。このように多様な器形の食器が出土した部屋をここでは「キッチン（台所）」とした。

この「キッチン」は、調査区を北に拡張したことで部屋全体を検出することができた。部屋は約三・三×二・八メートルを測り、床には岩盤の凹凸を利用した施設が設置されていた。本来の床面はおそらく岩盤の上に敷かれていたものと思われるが、明確には検出できなかった。部屋の北西部では、岩盤が約五〇センチメートル窪んでいた。その窪みに一列の石列がゆるやかな円弧を描くように配置されて、方形に近い空間が築かれていた。この遺構の底にあった堆積層からは、大型の調理用土器の破片や玄武岩製の磨石（円形で中心に穿孔のあるタイプ）などが出土した。また、この遺構の外、調査区の北西隅からは、長い柄をもつナイフ形鉄製品や鉄釘などが出土した。「キッチン」の第1層からは、イスラーム時代のコインも出土した。

キッチンの北壁は丁寧な石積みで作られた壁であり、少なくとも二つのニッチ状の構造物が位置していた。ニッチは、高さ約七〇センチメートル、幅約六〇センチメートル、奥行き約六〇センチメートルを測り、西側にあるニッチは、「キッチン」の北隣にある空間（部屋）まで貫通していた。ニッチの天井部は小さな薄い石を使用したアーチ構造になっていた。東側のニッチは、東半分がさらに調査区の東へと続いていた。つまり、「キッチン」の北東隅は東隣の空間（部屋）につながっていることになる。

「キッチン」の東側、つまり調査区の北東部では、床と壁がプラスターで覆われた部屋が検出された。プラスターは少なくとも九層になっているのが観察された。つまり、この部屋は床と壁にプラスターが何度も塗られるほど丁寧に補修されながら使用されていたと考えられる。この部屋の機能がどのようなものであったかはまだ不明であるが、一つの可能性として、穀物を貯蔵する空間とも考えられる。穀物を湿気から守るため、プラスターを塗布した容器に入れることは中東の民族事例からも知られている[22]。厚いプラスターの層は壁の下部までしか検出できなかったが、おそらく壁のかなりの高さまで塗られていたと思われる。この部屋の床面のレベルは、「キッチン」の岩盤と比較すると約一メートルの高さにあった。

調査区の南側では、二つの空間が検出された。北側では、東西にも壁をもつ部屋が見つかった。この部屋の西壁は少なくとも三列の石列で構成されていた。東壁は一列の石列で、ここに出入口が位置していた。北側の部屋の床面にはプラスターが塗られているのが確認された。

プラスターの保存状態は上述した調査区北東部の部屋ほどよくはなかったが、何層かに塗られたプラスターの床が部屋の中央部から東側にかけて広がっていた。床面のレベルは、北東部の部屋とほぼ同じであった。なお、この部屋の南壁は調査区の外に位置していたため今シーズンは検出できていない。

上述した部屋の出入口の外側（東側）では、少なくとも三つの壁が検出された。このうち東側の二つの壁はレベルから見て一段階古い時期の壁と考えられる。

V. まとめ

今シーズンのブルジュ・ベイティンにおける調査成果をまとめると、以下のようになる。

（1）本遺跡は二重の壁（周壁）で囲まれているが、壁の基礎はビザンツ時代に岩盤の上に建てられたことが明らかとなった。それ以前の居住の痕跡は確認できなかった。

（2）周壁の西側中央部には、二本の石柱をもつ門が設置され、その内側には石敷きの床をもつ部屋が設けられていた。この門は、三連式であった可能性がある。門の南側には、モザイク床をもつ部屋が周壁の内部に造られていた。

（3）ビザンツ時代の建造物が破壊された年代はまだ特定できないが、少なくとも三度改築されていることが確認された。最後の改築は、土器から考えると、マムルーク朝時代だったと考えられる。

（4）遺跡の中央南側に残っているブルジュの西側では、ビザンツ時代で二層、十字軍～マムルーク朝時代で二層建築層[23]が確認された。ブルジュ本体の石積みの大半は、十字軍～マムルーク朝時代のもののようであるが、何度か修復・改築がなされていると考えられる。ブルジュの基礎は、ビザンツ時代最下層の石敷きを壊して設置されていたが、これがビザンツ時代のものなのか、それより後代のものなのかに関しては、慎重に判断したい。

（5）本遺跡の東側部分では、マムルーク朝時代の建造物と家畜小屋が検出された。北側の建築（C2地区）は、アーチ状の屋根を持ち、ニッチの施された壁やプラスターが何度も塗られた部屋がある特異な性格の遺構であった。

来シーズンは、ブルジュの性格と遺構の変遷をより明らかにするため、その内部の調査を実施したい。また、

周壁に関しては、門の全体像を把握することと東側部分の輪郭を把握することが課題となるであろう。

参考文献

Albright, W. F. 1968. “Chapter 1 : the Site of Bethel and its Identification,” in Kelso, J. L. ed. *The Excavation of Bethel (1934－1960)*, AASOR 39, Cambridge MA : American Schools of Oriental Research, 1–3.

Arnold, P. M. 1992 “Beth-Aven,” in D. N. Freedman ed. *Anchor Bible Dictionary*, vol. 1 New York : Doubleday, 682.

Avissar, M. & E. J. Stern, 2005. Pottery of the Crusader, Ayyubid and Mamluk Periods in Israel, Jerusalem : Israel Antiquities Authority.

Bagatti, B. 2002 *Ancient Christian Villages of Samaria*, Jerusalem : Franciscan Printing Press, 30–34.

Conder, C. R. and Kitchener, H. H. 1882 *The Survey of Western Palestine. Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology*, vol. II, Sheets VII–XVI, Samaria, London : Palestine Exploration Fund.

Dever, W. D. 1971 “Archaeological Methods and Results : A Review of Two Recent Publications,” *Orientalia* 40, 459–471.

Finkelstein, I. 2008 “The Archaeology of the List of Returnees in Ezra and Nehemiah,” *PEQ* 140, 7–16.

Finkelstein, I., Bunimovitz, S., and Lederman, Z. eds. 1997 *Highlands of Many Cultures. The Southern Samaria Survey. The Sites*, Tel Aviv.

Finkelstein, I. and Singer-Avitz, L. 2009 “Reevaluating Bethel,” *ZDPV* 125, 1–48.

Kelso, S. L. 1968 *The Excavation of Bethel (1934－1960) : William F. Albright, Director 1934, James L. Kelso, Director 1954, 1957, 1960 (Jo) int Expedition of the Pittsburg Theological Seminary and the American Schools of Oriental Research in Jerusalem)* (*The Annual of the American Schools of Oriental Research* 39), Cambridge : The American Schools of Oriental Research.

Kelso, S. L. 1993 “Bethel,” in E. Stern (ed.) *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 1, Jerusalem : Palestine Exploration Society, 192–194.

Köenen, K. 2003 *Bethel. Geschichite, Kult und Theologie* (OBO 192), Freiburg, Schweitz/Göttingen.

Livingstone, David, “Locating Biblical Bethel Correctly, Part 1, Part 2,”
http://davelivingstone.com/bethel14.htm ;
http://davelivingstone.com/bethel14b.htm
(二〇一一年一〇月一七日閲覧)

Al-Maqdissi, M., Parayre, D. Sauvage, M., 2010 “Mission archéologique syro-française de l’Oronte Tell al-Nasriyah et Tell Massin : les sites quadrangulaires, nouveau regard. Rapport préliminaire sur les opérations des campagnes 2007–2008,” *Akkadica* 131 fasc. 2, 165–200.

Muller, R. D. 2011 “Gazetter of Iron I Sites in the North-Central Highlands,” *Annual of the American Schools of Oriental Research* 56, 155–157.

Prag, K., 2008 *Excavations by K. M. Kenyon in Jerusalem 1961–1967, Volume V : Discoveries in Hellenistic to Ottoman Jerusalem , Centenary Volume : Kathleen M. Kenyon 1906–1978*, Oxford : Oxbow Books.

Rainey, A. 2006 “Looking for Bethel. An Exercise in Historical Geography,” in S. Gitin, J. E. Wright, and J. P. Dessel, eds. *Confronting the Past. Archaeological and Historical Essays on Ancient Israel in Honor of William G. Dever,* Winona Lake, 269–273.

Robinson, E., 1856 *Biblical Researches in Palestine and the Adjacent Regions : A Journal of Travels in the Years 1838 & 1852, by Edward Robinson, Eli Smith, and Others*, Volume I, 2nd ed. London : John Murray.

Seger, K.（ed.）1981 *Portraits of a Palestinian Village : the Photographs of Hilma Granqvist*, London : The Third World Centre for Research and Publishing.

Sweet, L. E. 1974 *Tell Toqaan : A Syrian village*, Museum of Anthropology, University of Michigan, No. 14, Ann Arbor : the University of Michigan

Taha, H. and D. Sugimoto, 2013 “Beitin : An Open Archaeological Park,” *This Week in Palestine*, no. 187, 52–54.

http:// www . palestineremembered . com / GeoPoints / Beitin _ 897/index.html （二〇一二年一〇月一七日閲覧）

杉本智俊 二〇一三「「ベテル」遺跡の現状―二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『考古学が語る古代オリエント』一〇二―一一〇七頁。

杉本智俊・間舎裕生 二〇一三「二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『史学』八二巻一・二号、一〇五―一二七頁。

註

（1） 本報告は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号24251015（研究代表者、杉本智俊）による成果の一部である。

（2） ベイティン村の位置と地理的環境については、昨年度の予備報告（杉本二〇一三、杉本・間舎二〇一三）を参照されたい。本年度は、本遺跡と谷をはさんだ反対側（西側）に位置するワディ・タワヒーンのネクロポリス（岩窟墓群）の調査も行った。ワディ・タワヒーンの調査については、別箇に報告する。

（3） Rainey 2006参照。Livingstonは別の立場を主張しているが、一般に受け入れられていない。

（4） 例えばバガティ（Bagatti, 2002 : 34）はそのような可能性を示唆しているが、考古学的調査がなされていないので確定できないとしている。Condor and Kitchener 1882 : 307も参照。

（5） コンダーとキッチナーの記述には、「教会」としている箇所（三〇九頁）と「修道院」としている箇所（三〇

七頁）がある。ベイティン村では、テル型遺跡（テル・ベイティン）からビザンツ時代の市門、デキマノス・マキシムスと考えられる列柱道路が発見されており、テルの周辺では大型の貯水池、給水施設、農業施設、教会跡なども確認されている。この地域がキリスト教の巡礼地として発達した可能性が考えられ、その経緯を知ることは、パレスチナのキリスト教化のプロセスを知る上でも非常に興味深い。

（6）ブルジュ・ベイティンと「ヤコブの梯子」の幻を結びつける見解については、コンダーとキッチナー（Condor and Kitchner 1882 : 309）が、ヒエロニムスの意見として紹介している。「金の子牛」が置かれた「高き所」は、「ベト・アベン」（「邪悪な町」の意味）として預言者たちに非難された（ホセア10 : 5等参照）。これがベテルの町本体から離れた場所にあった可能性については、アーノルド（Arnold 1992）が議論を整理している。

（7）テル・ベイティンに関しては、オルブライト単独（一九三四年）およびオルブライトとケルゾー（一九五四、一九五七、一九六〇年）によって指揮されたアメリカ調査隊による発掘調査が行われた。しかし、その調査報告には批判が多く、再調査の必要性が指摘されている（Dever 1971 ; Finkelstein and Singer-Avitz 2009 等参照）。ベイティン村に存在する他の遺跡に関しては、ブルジュ・ベイティンを含め、本格的な考古学調査はまったく行われていない。

（8）この表現はやや冗長であるが、現時点ではまだ詳細な遺構・遺物の検討が進行中であり、該当する層位が十字軍、アイユーブ朝、マムルーク朝時代（一二～一四世紀）のどこにあたるのかについて確定できないので、暫定的に用いることとする。ただし、出土遺物からマムルーク朝時代に相当する可能性が高い層については、「マムルーク朝時代」として言及してある。

（9）この部分が屋内空間だったのか屋外空間だったのかについては、現時点では確定できない。

（10）B地区の堆積は、深いところでも約一・五メートルしかなかった。

（11）焦土はほとんど見られず、周壁にも被熱の痕跡は認められなかった。G6区南東端で石敷き床の上から灰の混じりの土層が若干検出されたが、その由来は明らかではない。

（12）ビザンツ時代の遺構が最初に破壊されたのは、アラブ侵入の時かもしれないが、それを確認する証拠は得られていない。

（13）北側の壁と南側の壁は、周壁に比べるとはるか小さな石で、粗雑に造られていた。北側の壁は一段しか残っておらず、南側の壁とは方向や角度が異なっている。この壁の北側はまだ調査されておらず、性格は不明であるが、後述するプラスターはこの壁にも接していた。

（14）部屋4からは緑又は青色のガラス質の物質が付着したプラスター片が出土しており、床や壁に塗られたプラスターには本来彩色が施されていた可能性もある。

（15）使用されている石板の規模は違うものの、同様の床は、

部屋4の東側の周壁の東側（「中庭」）からも出土している。

（16）「石臼」は、まだ具体的な機能が明らかでないが、現在のところその形状から「臼」としておく。

（17）「石臼」はモザイク床を破壊するために部屋に放り込まれたというより、岩盤まで到達する穴をモザイク床に掘り込んで、意図的に設置されたように見える。今回の調査で「石臼」周囲の土から炭化物が採取されたので、将来「石臼」が置かれた時期を判断するための材料として利用できるであろう。

（18）現在残されている最上段では、幅約八〇センチメートル、厚さ約四〇センチメートル、高さ約六〇センチメートルの切石がみられた。

（19）イスラーム時代の土器については整理作業が現在進行中である。現段階では、予備的な所見として、いわゆる特徴的な焦げ茶色や黒色の彩文がある「精製手づくね幾何学紋土器」（Fine Hand Made Geometric Painted Wares : HMGPW）、および各種の施釉陶器（White Slip Under Glazed Painted Wares, Sgraffito Wares, Monochrome Glazed Wares など）が確認されている（cf. Avissar and Stern 2005 ; Prag 2008）

（20）このリンテルは、コンダーとキッチナー（Conder and Kitchener 1882 : 307）がブルジュに埋め込まれていると報告しているものと同一と思われる。それによると、両脇のモチーフは同じものがスケッチされているので、削り取られたモチーフは六つの花弁をもつ花のモチーフの可能性が高い。

（21）B2地区の「中庭」で検出されたモザイク床は、約一〇センチメートル違いの八七八・一〇〇メートルであった。しかし、B1地区の門の近郊で検出された石敷き床は八七八・八〇メートルで、約四〇センチメートルの違いがある。

（22）現代におけるプラスターを塗布した穀物貯蔵箱の民族事例としては、北西シリアの例（Sweet 1974 : 119, Fig. 33）とパレスチナ自治区西岸地区の例（Seger 1981 : 29）がある。また、近年、マムルーク朝時代の部屋の内部にプラスターが厚く塗られている事例がシリア中部の Tell al-Nasriyah から報告されている（al-Maqdissi, et al 2010 : 192–3, Fig. 30）。

（23）第I層で、建築遺構は確認されていない。